BBI

雜

イ

う

人

ŧ る

11

ŋ

交

じ

て

11

る

は、

雑

民

全

般

安

音

痴

蕯

塺

Ш る

ま

某 大

て国に

の自拝

動、

て 支 会

山 維 治

理

重

複 l

す

の雑

大 脅

て が

行 将

くで 来に

あ

ろう たっ

民 情

安村 山

杯 新

制

下 と

に る 実

ス

タ

1

1 重

Ļ 責

し威

لح

ころ

る

前 近

 \mathcal{O}

ジ 粗

な

安る

平成27年度 事業計画(成果)

全般成果概要

平成27年度方針のもと役員改選に伴う新体制により、会長を核心と した各グループの各事業への積極的な取り組みと、県・支部・会員の一 体的な活動により所期の成果を収めた。ただし、会勢拡大施策について は、新入会会員の増勢を図ることが出来なかった。また、今年度も、退 会者(逝去会員を含む)が多く、各支部の特性に応じ更なる日常活動の 充実により会勢の拡大と充実が重要と思われる。

- (1)総務・組織の事業総括
- ア 会勢の充実・拡大
- (ア) 正会員

入会者数80名 (陸69、海7、空4)

- (イ) 家族会員の増勢
 - •入会者96名 現在会員数153名
 - ・加入率徐々に向上
- 全支部加入率10%追求 (ウ) 会員の定着率向上
 - ・入会1年未満の退会抑制と定着率 の向上を図るため、フォローアップシステム として「パートナー制度」を設けて推進中
- イ 組織の改編・強化
- (ア) 新支部等の結成促進(新規無し) 新設部隊設置を見据えた奄美 地区の活性化を重視
- (イ) 役員後継者の育成・登用 幹部出身の偏り是正の為准・曹出身者 の登用に留意
- ウ 会務運営の効率化
- (ア) 定期総会成果 5.24(日) 総会,防衛講話,懇親会の3部構成 総会119名,防衛講話(講師:1空群 司令)139名、懇親会151名
- (2) 市民・防衛・広報の事業総括 ア 防衛意識の高揚
 - (ア) 定期総会時の防衛講話139名参加 (イ) 安全保障フォーラム(10.12)540名参加
 - (ウ)奄美セミナー(宇都参議院議員講師)
 - 奄美市&瀬戸内町で実施230名参加
 - (エ)九州・沖縄ブロック研修会(11.28~29) 宮崎大会に会長以下34名参加
 - ・各県の問題点について現状・対策の確認 •防衛講話&現地研修の実施
- イ 防災・国民保護施策等に対する協力 (ア) 隊友会自衛情報ネットワークの維持・拡充
 - •12普連情報提供者22支部916名
- (イ) 自治体等の行う防災訓練等に参加
 - •霧島市総合防災訓練(国分支部)
 - ・いちき串木野市防災訓練
 - (いちき串木野市支部)
 - 桜島火山爆発総合防災訓練 (鹿児島地区協議会)
 - ・防災ボランティア研修会
- (鹿児島地区協議会 3名参加) ウ 地域社会の健全な発展に寄与する協力
- 県内公益目的事業の推

- (イ) 復興支援活動への参加 東日本お助け隊への参加を促進
- (3)部隊等支援・協力諸団体・親睦 ア 部隊等支援
 - (ア)訓練・国際貢献活動・災派等 の協力支援
 - ・激励金の贈呈 1空群のソマリア沖海賊対処活動 (7.27鹿屋航空基地)
 - 駐屯地等記念行事に参列 鹿屋(4.25)、北熊本(4.26)、川内(9.5) 下甑島(8.30)、健軍(10.5)、国分(10.25)
 - (イ) その他の自衛隊活動支援
 - ・スポーツ大会等活動支援 (祝い金の贈呈) 国分駐屯地
 - ·師団武道競技会総合優勝 •全自空手大会優勝
 - (ウ) 部隊等との交流の拡充
 - ・意見交換会の実施 鹿地本、国分、鹿屋、川内
 - •基地司令等歓迎会
 - 1空群、国分(11.25城山観光ホテル)
 - 賛助会員への広報 各駐屯地等設置の「隊友会 PRコーナー」に「隊友さつま (新聞)」等を掲載
 - イ 予備自衛官等の支援
 - (ア) 記念品等の提供(招集訓練時)
 - ・体力検定・射撃優秀者へ付与 ・参加者全員に対する記念タオル の配布
 - (イ) 鹿屋基地での海上要員招集 訓練参加者と懇談会実施(9.25)
- ウ 殉職隊員等の慰霊顕彰・援助
- (ア)殉職者慰霊
 - •県出身殉職者慰霊祭
 - 9.12 県護国神社にて開催 各基地等追悼式に県会長等参加
- (イ) 戦没者慰霊
- 主要な戦没者慰霊祭に会長 参加
- ・支部で墓地清掃活動、慰霊祭 等に参加
- 工 親睦・福祉厚生
 - (ア) ディフェンスさつまゴルフ大会(10.15) 47名参加(鹿児島国際GC)

活性

弋

あ



顕揚会会長 田島 勝征氏

等 まは が左 を 兵 が が閣 必 攻 得 イ ま 撃 あ 廿 近、 要 る り \mathcal{O} カュ に は、 気 辞 ょ 雑 が 書 粘 ま 来 な ま

れ知高政

真 な 叫 いん同

民

らに党

で グ

る。 1 コ

いル

追 色

れ

T

V

た和の

年加々ほる

と

う

0

さ

れ昭

と

争

か、法案法

案

لح ス

制

う

全

部

 \mathcal{O}

なか辞

要

で

な

全

玉

 \mathcal{O}

1 日

0 本

で

る 玉

に益

鑑

み、

 \mathcal{O}

4 がい述

もに

辞 うだ。 某 付 を り え 引 強 大 11 たい 11 い国 う 7 の理明 合 ŧ \mathcal{O} 解 字だい 説尖解かい

広 だ 軍さ あ辞 ろ 雑う以際 る苑 れ 7 か降 よが 悪 軍 る る 付 ۲, 単 沓、 意 は、 8 語 味 雑 雑 0 は 2 V で 念 使 兵

は

を T 今 向 は、 更 レ 国 回 報 がビ 迭 え民は道 Z 2 \mathcal{O} 安の £ れ むことに誤ったイ すたよ 保 先 の月 あジ 向 に 法 鋒 で 報 報 カュ \mathcal{O} 植 制 的 ば う 道 道ら え あ 反だ。 イメ 存 恐 付 に がキ ヤ民 熱 関 在 政 要 ろ け] 府 彼 因 連 で、 ス放 5

にい持

 \mathcal{O}

際、

そ

こと

が カュ

لح

な

に

11

て 8

述

た

思

い取

つ成

年

度 省 え

ŋ 題

組 及

0 関

り

た 信

よく あ 全

る 1

反 迎

を で 体 管

ょ

うと

し

念 理

及てを解安は勢増のにい持し全、に大脅 報求必日 を自 要 本 退 持 の官 \circ \mathcal{O} で 保長はが 大 な き へ機 実 態 責

家 た 生を、 なる 私の を、 か務達普 近広を 何 長 代 平 で

活 ょ 用 ささ う 没 揚会会 る 者 かれ等 墓 る 長 批 地 \mathcal{O}

征

勝

は、道

自 幹年 部 度 候は 補 如息

陸

協力について(通

達) 」

義

 \mathcal{O}

会勢拡大施策に対する

ら示して頂 策として、

いた「隊友会

各幕僚監部 ①会員の

の具

・基地との協議の場の共現化による対象駐車

の屯

2

② は み 進 基 国 行 を会地 分に 強員 を 0 1 対川い会 を て 勢 象 内 とし、 拡の 向 定 駐 段施 大 増 屯 地、基 T 施 勢 づ策策 入 で 取 会 鹿 きの کے 1)

充実」

て 早 不 いみび のる £ 会会 送 会 司 長 ŋ を \mathcal{O} カコ 拡 6 懇 仕 大 点 け 施 て 切え 充 策

り組

む所存です。

憲

「会勢の

拡大・

増

理 由

役友 割会 の活 現の 化べ 1 ス بح 67 な 7

る隊

行◆

刷◆

はい

1

な \mathcal{O}

年

喜

鹿児島県隊友会

◆発行責任者◆

村山文彦

(株)新生社

鹿児島市七ツ島

う

◆印

症

G

Q

 \mathcal{O}

に

成

年

圧 敗 向

よ後道

を

7

所 2 7

掌

す



要領の

明 確

化等により、

日

入会者の増

勢に努

設定及び促進活

動

 \mathcal{O}

実

施

索の状況であり、 と課題を踏まえ、 次第です。 **点を引き続き重視**して であったと反省して 平成28年度は、 次の 1 グ た 段 いる 中模 反 2 省 る階

【H28年度 も地域貢献 に頑張ろう】



児島県隊友会会長

べく真摯かつ前向 p副会長 所存です。

友会活動の一 気に燃え、 重要性を各常務理 りつつ、「やり 各支部との 共々肝に銘 やりが 感じら 助」にな 連携 きに れる Ľ 事役

いと

じながら村山会長の意を

さ

所

各支部への普及を図って 行きたいと思いま 置を見据えた奄美地 強化策」は、新設部 第2の「組織の改編 化を重 掌す 視。 る事業 いを感 す。 X 隊 意 が を \mathcal{O} 設

ま

11

事役

来 で たっ つ、 り、

隊も歴史 文を残し 論的にはは いう訓えです。▲私の周つにして国難に当たれと 軍になる ると思 を食べた者としての いない方々が多く りにも隊 者 一力」と読み、日々 とあり、 地 戦 台を超えて 退職者も あ は 紀夫氏は「自衛隊は 五. て 法 衛隊が発 夢です。」と今 \mathcal{O} を経過し で申し上 `政策提 いませ 九条」 | 衛隊が が力を合わせ、心 の碑文に「百万一 国武将・毛利元就 頽廃である」という り、 明白で、国家的欺 年割腹自決した三島 大事 同じ自衛隊の釜 日 啄友会に入会してんです。▲私の周 がたい 本人の 現在 衛庁の 違憲であること は未だ改正 そ、「憲法 言書で要望 ます。▲これ じ志を持って な年賀状仲間で を刻み、自 ん。 ▲ 昭 ため私ども 使」も法案化 百万を「一 ました。 ましたが、「 11 位百万人の大 る」という檄 も呼び るようです 友人で. 魂・道 省昇 の絆を の針を 和 心の墓 かで広友正 繭で L を 皆 日 法 兀 さ カュ 格、

•

 \mathcal{O}

所在

有無等) に応じ

 \mathcal{O}

特性(駐屯地・基地

向上策とし

ては、各支

たの部のめ

るとともに、 ②定着率

活動と成果の把握を行

 $\overline{}$

全て心に残さず相

談する

本全国の神々に誓う。

ろしくな

いこと

として

る。

隠さずあり

 \mathcal{O}

ま

から村々に対

し、エ

事に関わることは、

釈、

四大天王を初

め、

兄 密 2

仕事

のことなど全て秘

遜

ないよう心 して分をわ

がける きまえ

ち

かけない。

なお、

自分

奉

るまで無作法なことは、は、もちろん部下にいた

は、もちろん部下に

た

州

· 勢 御 書 幕

弟であっても一切

6

ある時は、「神罰

を要することは、

親 子 ŧ

一切しな

つで

ŧ

違

有り

刻

元

速

るな

らば、薩摩藩

士の

た。 \mathcal{O} 戸 カコ 3

れを後世に

残すことに

」(道義高

揚

 \mathcal{O}

原 な 誉

請御手

ては

ならない。

司 君

に

4

伝い方並びに普

げ

って

いる人々、

請

求 し

村方

が法

な代

金を

耆守:

平

右

監 多

様 伯

西

尾

隠岐守

れ

ど

難

題

吹

足

0

は、

銀、

リー

ズ

宝暦

活

水

人 エ

支

るの

5

れ候間、

その趣

存ぜ

6

当

幕府

の権力

は、

隊

月 号 昨 あ 年 こ の 発煙 友 隊 Ш. 筒 友 談会 潮 2 7 年 7 敎 友会 納 雄 豖 想 会 か もらった。 の 歌 6 敏

實

とは

知って

たけど、

及に努め

た

する普

及

ŧ

があ

るこ

ディ

は

歌詞と楽譜を送って

た

本部

人差が

ŋ

カュ

それ

は「隊友

作曲

吉村

武武史

(昭

1

目

全

会員全員が

祖 5

練した「隊

)歌」は

陸に海の

現職時

 \mathcal{O}

鍛え

色ない、

力

強く堂 隊歌演 友会の

た大合唱で来賓・

現 職 一々とし 図と逐 作詞

酒

井良之

ょ 平

11

ょっ

さ 玉 るが、 [にその た。 れ れ たる 結果 て新会歌を全員で合唱 5 月 を拝読 ま 物で で会 発煙筒によると全 は、予想以上の った事も 周 した。 は平成 歌の普及がな あったとの 知度を 日 確認 9 会に 年 実 慘 県 で 事 結 L 和 49年3月

た時 から 普 護りひたすらに の隊友会」 結す おおこれ にまた空に かって 理事会決定) であった。 精鋭が ばれて今こそこぞり 早速これを国 深 以 下 3 きえにしに 分自

ぞ 我ら

了した。

4

般

参加:

者

 \mathcal{O}

大拍

手で終

番ま

さらに全

国へ普及す

衛

が

本部総会にお

11

て、

私

ある。

必要な県は

連絡下

年 唱 作成を依 音 2 楽部に 指導をお願 名に対 (まっ た の発表を目 演奏とテー 国分支部会 いして、 L のである 演奏と 標に プ 対 来 歌 \mathcal{O} だけ注文があり、 県会長 お願

中原敏實氏

会或るごとに全員に

で

あっ

全

玉

の会

歌

 \sim

 \mathcal{O}

意

識

は

勢

州

が

è

あ

りがたき仕

中国

西沙諸島

手

ムせ、

付 Ш

合 け

わ な

せと

お受けし

て

11

る

け々

一伝い仰尾

会で合唱し

て

国分支 案外 年の県 図っ 発表会であ な 歌 た 早 り 詞は けて < 部 総 が、 Α 会 労 7 演 る 個 ス Κ として、 りがた か出てこない)。 あった。 友と 成 以 隊友会として近寄 11 から 蛇足ながら 言葉 う言葉が 雰囲気が 新隊友会 歌って たる 私 あ ŧ 1 達が は高 る \mathcal{O} 口

に留めて戴け 上 の 計 3 友と言う言葉が各 感ずる雰囲気がある(隊 でもかと隊友会を身近に やすく、これでも 会歌はシンプルで分 事実として 回出てくる) 歴史の れ ば かこれ 深 0 甚で かり きた 片 1 隅 以 口 な 記 うとする動きであ 国際 こなって 紙

いる。

世

紀

 \mathcal{O}

欧

州

で

吹

き

 \mathcal{O}

感度

国家防

衛

 \mathcal{O}

一視した

生オケで歌いテープの いした。結果は愛 いるとの 毎 氏 さ 年 1 11 と 総 知 人 を終わりた 渡る事を切に祈っ 鹿児島県 自 普 新 1 及 さ 隊 れその 音 友会歌」 \ \ \ 楽 祭」 大合 て が で

青

山昌

嗣

相 談役 中原 隊友会 敏 實

台湾

体を

記

る可く候。 井左衛門 隠岐守 及ばず 2 月 2 5 日 将監 尤もこの 候、 尉 忠 忠 武 尚 恐 寄元 Þ 謹 節 事 る。 たことに 絶大であ 業のため、 ることなど思いもよ 藩 重 \mathcal{O} 要な仕事を任され 浮沈に関 対する御礼で 生きるか 命を拒

対

する

(諸役人の

連

るまで一切受け

取らず、

言 参

Ш

工

事

に

衣

類、

諸

道

具

酒肴に至

仕か①

暗いこともせず、

を重んじ、

いささ

起誓

また、

借りることも

L

な

尾 1 に

松平右近

わる大

を占める中、

家老平田

あ

徹底

抗戦する意見

が

多

作戦会議)が行

6

面

前に 行

いて、

評

定 年

が

わ

藩

主

重

から南

は

おれ、

死

負は、

事第一 \mathcal{O} 公儀

لح

して、一生懸

を嵩にきて、

奢ったよう

堀 酒

相

模守

正.

亮

カュ

 \mathcal{O}

瀬

戸

時

すことぐらいなら

むし

⑤幕府の役人であること

を出して仕事に従事

なことは、

絶対にし

な

11

6

請

また、

多良

家の

庄

百

姓また人足に対

府老中へ け 田

差

出

した

請

7お手伝い

普

請

受諾 察さ

まで

ば、

腹も立

つが、

本

言うと「ニッコリ」

笑っ 普段

あ

ŋ̈́

予定

時間をオー

バ

し主催

側をやきも

きさ

合は熱戦又熱戦の

連続で

てくれることです。

行 め

部の苦悩が推

れ \mathcal{O}

る 執

幕

もとより全ての上

してもよくないことは持

け

き幸 伝 書 11 • せに 仰 尾州 見 せ付 U 々御 け 5 奉 り れ 普 の経緯 の命令を受諾した江 では、 宝 2月25日、 ·暦 3 年(175

幕府

6

本分ではなかろう

救うの

んは、

人間とし

て

 \mathcal{O}

のために、

同胞の

難 日

藩

本の国のために命

をか か、

け 日

って詞を蒙ること梵天帝反ある時は、「神罰によ 幕府 事材 日 松 平 を 呈 として申し上ぐべく飛 候、尤もこの節 こみ奉り ばざる旨 薩 摩守 候。右御 仰 せ下さ 門 堀 田 月 参 が府に及 2 1 れ 相 請 模 け カュ 本 守 日 札 書 L 꽢 使者をたて急を告げ る。

年 1 国元に 月 1 3 いては、 日 のことで 総登 た説諭によ ろう。 点)という条理を尽くし 得た後、 とめ上げ、

藩主の

裁

論を

移されたの 支 部 きは、 である。 暦4年(1 石 口 民 男

所見 で 子 て国 際 秩 序 に っ

6

する動きが

目

 \mathcal{O}

無視

よう

る

実で

は

立

加えて、

者 あ

京大

に新

田

豖

航

空

整

は

晴

天に準

斉と実施され

中

玉

民

 \mathcal{O}

言っ

て

問

題

感情に

例し増 字は・

|減し、

玉

原 国

が拡)は、国分支部

部

長

宮

問

並

んでの 雨

厳し

11

の中、

数十

場後の弁当の配

1 支

2 月 6 地で

日 わ

等と惑ったが参加

者に

は布

 \mathcal{O}

は力に

比

例

して膨っ

ウクライナ問題 序が 法を S 大 軸 中 きく とし ず 勢 れ 玉 九 揺 て b \mathcal{O} 設 玉 何だが、 立時 民問 境 を抱えた E を 題、 \mathcal{O} えたた た か がと

が、

旨

いる。

鹿 児 張す

日)

新

田

原基

行

出

島県、

特に南西 述べて

はそ

れた航空祭を、参加

者 4

加者の大多数は、会員 喜んで頂けたと思う。

り、「大は、会員以こ思う。参

義

玉

O

海

洋

進

出

ルー 諸島

1

に

8名中型

バス2台で見

学

外

の方たちであ

世回が

位 \mathcal{O}

置しており、微細

な

れ

ない

今

ある。そうし

が、ブルー

飛行中止以外イベンブルー インパルスの

た意味に

おいて隊友

会会

っても兆

候

の看過は

許さ であ

実施の可否が心配さ

れ

た

参加したい。」という声変楽しかったまた来年も

が多く、

毎回喜ばれて

い声

る。

今

口

0

航

空祭

した。当日は朝から

雨で

きた

で 国際 近

玉

代よりも不安定な情 次、第2次世界大戦 秩序の常識を変えよ 9, 第 勢 \mathcal{O} る。 界中 帰 する 持できず国 \mathcal{O} 不安定さが 姿があるなど、 理想を放 そしてテロ ギリシャ 民主主 U 家主義へ まで 気に、 り

的にとらえると、 ストファリア 述は 幅の枠もあ 国家主権を認 無理だが、 り、 体 めた 歴 詳 制 6 以 史 細 4 荒 £ 哲 治る 学者 家 6 れた大動乱

な

と

の が

言葉 壊

を

愛

生

記

が秩序

れ

たら

之表

曲技飛行を楽しむ

分に達成したと強く感じ

国分支部

村

勝

義

して、

所

期の目

的

的を十二

自衛隊と市民の

架け 参加

橋は、と

正

義は を直

れ

て

あるべきだ。

あった者と

ウェ て育ててきた国 国際秩序の基盤とし 国が対立を深める 際法 \mathcal{O} 権

族作文

咪

響き

駄文

· 全 国

唱

が



0 動

歳までは、マ

府の無理難題と思え 「抗戦して藩を潰 われた。 機を 玉 ろ 靭 数 公 イアとして参加して イケア ŧ 縄 に も 出 在まで25年続いていま \mathcal{O} 興味 ル大会同様に全国大会 所 まで遠征しました。 5 2 発表会ではバレー 歳ころ を持ち 通うように 慰問 また県内 もボランテ から 始め、師 なり りに いま のデ

ともな にも で、 \mathcal{O} お 休まず いくら 笑い声が絶 茶 口 会もとても楽 \mathcal{O} 練 参加、 習(2時間 楽 えるこ L 練 習 11

東支部 町田御夫妻

楽し

々を

お

会員家族 鹿児島

町 協

田

嘉子

木芙

区

議会東支

って ませ 時で くの友人に 現 今の 在 ん。 る 事 恵ま は 生の

間

違

あ もな

ŋ

ムに所属し、全国 州大会にも出場 かすことが大好 夢中でクラ ボ 沖 現 匠 ドゴ 楽 を報告することも一つの を待つ主人に一日 5 \mathcal{O} れない状態ですが、主人 ここ数年主人の体調 夢中に んで 理 ルインワンでたよ」と 週1回参加し しみです。「今日 解と協力を受け ルフ愛好会にも います。 私の帰 十数 グラウ 仲間と楽 の成果 11 なが はホ が 年、 所 ŋ 優 属

夢中になることを見 を見せてくれる ことが少なくなりました はあまり表情を 皆さんも是非一 との触 時ば してく です。 かりは笑顔 顔に出す れ合 れる主人 \mathcal{O} つでも で、 つけ 私 りに逢い旧交を温める隊 休憩時間には、久し振 関する推敲や、 せ 友、また対 た。 戦後

布 \mathcal{O}

石、

寄

結

果に

の心を癒

が、この



熱戦が続く大会の様子

餅田 守 守 隼人支部 志布志支部 村 田田原田 竹清良一 正 幸

热 戦 国 囲 分支部 基大

会

詰碁等の大切さを

指

れたこと

同

様

に多

催された。 等を含む)が参加して開 碁大会が、 センターで、 隊友 日31名(管理要員 当)による第6 会主催(国 国分シビック 2 8 年2月 分支 口

井

た。今回は初心者が多く 参加した大会であり、 拶、その後各グル 宮口県副会長 れて試合が開始され \mathcal{O} ループに 試 玉

分か

冥 稿を 4) で しま す

濵濱木 池 鈴 国 木分 彦則視義 吉

ご謹

横手修 会であった。 スの交流等、和やかな雰導する高段者と初段クラ 下之園昭文 (隼人支部) ・CDグルー 競 井 吉田豊昭 A B グルー E F グルー 技結果(優勝 気 分支部 もあり素晴らし (隼人支部) (国分支部) 素晴らしい大和やかな雰 佐 ブ 藤博 者 \mathcal{O} 記

Ġ

市老

連の若手委

県 •

県愛

瓢会会員が8

人、 ある

ま

人に見れ

も厚く、

公民館

 \mathcal{O}

会計、

尽力された。

他

区 住

個人特別会員

(家族)5

加工~展示まで

き

国旗、

隊

建

国記念の日

建

 \mathcal{O}

安寧と

恒久平

国和 国

走する為だ。

当日は、

隊友会の幟

友 頭

種蒔き~

発芽~ かでも

栽

2 普連音楽

部を先

義深

り

のがあ

ります。

える責任が有り

ます。

弘選手が当地の区間を

2

 \mathcal{O}

入会に

細 か く 培 〈 箪は、 箪 の

仕事をさ

毎

年

会旗、

そして支部の幟 霧島市:

旗

を偲

国を愛する心を

を継

承して

養うことを目的とし

て定

民一人一人が正

八が正しい愛!

玉

を2本立て、鈴東選手

子供さん、それ

祖母も駆けつけ

て

威風

を

れて

います。

心を強く持つことだと思

生日があるように日本

・ます。

人の偉

会員の皆

隊友会活 1 衛隊と国

に感謝する日で

ありま

民の架け橋」とな動を通じて「自衛

となり

互に

をそれぞれ会員が持って

いる。立派な作品を展示され

図るとともに国分支部の

大

盛

会

の

さ

る

盛

春

月

小 9



フ大会は

国分支

部

務局長

義

記

行う

します。

参

加

健闘ご活

お

国旗を先頭に堂々行進する

国分支部会員達

日

いこうではありませ

な日本

を

て

頑張っ て安心安

域の

為、

分支部

事務

局

中で

会役員等を 市のグラウンド

歴任及び継続

﨑

氏

にご相

談下

ル

フ 大

箪に興味の

方

毎年行

わ

・ンアッ

全隊な友 £ 定年退職し、 玉 して入会、 分 ス おられる。 入られた。 下井にご夫婦で住ん 氏を紹介し む国分支部 氏は現在76 ビス・・ ま 終 平 たい。 分会長 自衛官に 身会員と 成4年に 分 \mathcal{O}

者 の

ため会員

宅

カラオケ、

野菜作り、

瓢

) は 6

0

の里、

我が霧島

市 \mathcal{O}

されたこと

は

誠

に

意

美 歴

土を子孫 化・伝統そし

に

加工

な

瓢

加

分会長として

会

生き甲斐として

る

催さ

(支部

数名が

訪問

する

介

隊

らは、

世話

役として

りか

油絵等十数年の経験者で

文化

歩き会

奥様

を 取

参加者から

毎回

れ 切

て

その実力はプロ

級であ

る

日

祝賀式 月 1

典が

霧島市

玉

玉

記

あり

国会議

文喜

は、

2 月 1 (支部長

3

日

堀支部長以下6名で応

子 2 が 初 間

賞3こ

特に喜入前之浜

1入支部

J R

前之浜

駅前にお

之浜町

り 5 調 明

なり、は出年した。

走り、きた

一る回で日中とのもし

し鹿はつ回のえでに 児区た目出なあ続

センターで

参加

臨

地

私

達は

を応援場所に選

定した

スな目なか

優島間が

身の国分駐

大の子の

鈴

東

た

ŧ

の勝

行

2

本人はグラウンドゴ

1

から

務局

れる。

に立ち大会を運

太建

典国

に記

かの

国

分

支

後、

多

的 \mathcal{O}

に

動して、 ホー 视

貧

中行

周

亿

地

え

援駅

ゝ

抗

駅伝 周市

日万け今後

全後年押

過する程

おわを

目

撃されたそうである。

和

文

来る参院

宇都議員と楽しく 談笑する会員家族等

大いに興味を抱

かせ

る話

ナックにお

いて熱唱する 議と心配そう

き入

宇都

に見守る徳田秘書の

姿が

て

おその

とあ

るス

や安保法制成立後の

自

き

渡った。

衛予算の

運

コー

ルが会場全体に

響

ガンにした「ガンバロー

点等

上

位3位以内をスロ

対

7

_ 当 選

 \mathcal{O}

な

会 の と の るので是非隊友会・父兄 席 年会を1月 しており、 皆様と しくも恒例 話があった。 宇 都 語り 隆史参議院 角の 支部として ようと計 1 日 に 機会で \mathcal{O} 合 隊友会

例 立 た で の する国民意識の問題 の効果的な運用、 隊 15分間国政報 れ 巻く不 いて会員・父兄会3 野村参議退場の 宇都参 -穏な情 日本を 大口 \mathcal{O}

員

衛予算 拶哲に郎 後 さ 政 大 歓声と わり 春を おめ 、つどー」 が \mathcal{O} 聞こえてきます。 でとう、 絶え間のない笑 近に感じる2月 た 日 やっ イン ょ ら大き かった たない 重森春 志 な 布 じ

介 玉

> 会 員

終了

り易く、

納得するまで気長に、

会

な

梅

感

謝 • 絆を

ら受講

を得ています。 多くの皆さんから大好 講座を 涯学習」 「グラ 経

当初は42人 受講

く良い結果を出

せるよう

でしたがその後 今年度 は 9 年々増 3 名 \mathcal{O}

> 賞できなかった 出場し、入賞したり、

入賞したり、 入 進んで各大会に

今

宵

球

老木に

時

季

が暖

咲く、この

しさと悔

しさを

奮

何で、 花 が 梅の

また、これまでの 所帯になっております。 講生は276人を数え、 延 t 受 上

明日

 \mathcal{O}

生き

と 幸

る

人が集い、

人に

:間つく 積み重 習に励 次の発 りして楽

り ね

材料にし更に練

い。その

ラ

の言葉を思

長続きのするプレー 28年度は300人以 になるのは確実です。 を育てる】をモット 森会員は【楽しくて になり、 斐に繋がると信じて が健康維持と仲

熱心に指導する重森会員

(左から二人目)

外の各大会にお 格を取得してお グラウンドゴル との事です。 競技場の整 ルド普及指 森春男会員 煩雑な り、市場の、市場の、市場の、市場の、市場のである。 業務を 備、用 存在で 導員 フ協会の 集 \mathcal{O} 大 内 資 あ

献されてい 大会運 ま

発 展 ざして大 を 今 Ļ 後も 2 重

から金メダル 布志支部 期待しています。 ま国体では 岩根正夫 いに活 0 2 躍さ 獲 受 0 得 講 年 を 生 \mathcal{O} るめのか々

森講 座 が

辛せが、この老木の芸国安らかなれば、自然 なごみを与えてく の言葉を思い出せ 何で・・・・・? 幸せ 来ると す。 呼 Κ 何 れび花然 朝 ぜ

金峰支部長

掛上 恕 記

ナア・・・。 ウメエー 国の永遠の安定

今夜はイツ

梅の花鑑賞と焼酎を楽しむ会員達と

た生絆一て、 幸に備 いきを人、て大と国 せ ・を を 行切し民求 • 大 きにてのめ・切

【下甑島分屯基地 記念日のお知らせ】

- 川内駐屯地焔児太鼓
- 装備品等展示他

- 〇 時 期:H28.5.29(日) 所:航空自衛隊 下甑島分屯基地内
- 〇 イベント予定
 - 長浜郷土芸能出羽踊り
- その他:ご来場は長浜港

走大にの旗

【県隊友会定期

- 総会のお知らせ】 〇 時 期:H28.5.22(日)
- 〇 内 容
 - 総会
 - 防衛講話

支部思い 活 を 喜 て た応 支 い献我躍 < で々を 部

でのる少り土

よしに出喜うで思身入

援ときも誇郷

う自隊 新たにためたとしています。 貢に活し て、

土地・借家のことなら 兜島県行政書士会会員

業敵良行政書士事務所

FAX 0995-46-4677

(隊友会会員) 国分駐屯地正門前 お気軽に ご相談下さい

〒899−4322 鹿児島県霧島市国分福島 2丁目10-25

5 0995-46-467

出千屯の町援ての入会対下 思最ム獲目調

力走の鈴東千弘選手 応援の家族(左から奥様、母、祖母)

【訂正のお知らせ】

〇 第36号 3面 戦後70年「戦争体験記」 寄稿者氏名 南さつま支部 高田敏行 **→ 高木敏行へ** 申し訳ありませんでした。

13:00~18:00

○ 場 所:ジェイドガーデンパレス

0

世界中で多

機及び隊員を指定するよう、それぞれ待機航

応で

ロ行為に対して 発する卑劣なテ

り

可能な状態を維持し

て 即

お応



表札を掲げる所長と幕僚長

響測定所

予備2等陸曹

智

美

記

益智美氏

加した予備自の

会

11 皆様

に

隊の皆

務科

長

記

た 隊 対潜 鹿児島音 鹿児島試 平 スター 成 2 7 「鹿児 群 編さ 能力強化施 0) これまで「開 島試験 隷下部 れる「 験所 響測定所とし 年 海 上 1 は、 策の一 \mathcal{O} 自衛 所 隊であっ 隷下 新 を 1

の目玉として部 が発す 海洋業務 たに る 発 7 日 部

> 新たに「鹿児島音響 たものである。この

|測定 ため 指し び 音

補から予備

自と

戦場かも

れませ

ん

た言葉でし

として改編され

隊改編日となった1

加

 \mathcal{O} り 予備自:

お話を頂き、身

 \mathcal{O} 練

引 参

遠で今後も続きます。

な

年

· 央訓

練です

培っ

たこの絆

は永

衛艦隊司

令部幕僚長

示 内 自

や陸幕長

訓示を受け、

自

衛隊の方々は、

玉

将

よる司令官

害や様

表札

務

も大きくな

ることに

私

t t

っと近づけるよう努力し

け

れば

まし

た。

自衛隊

 \otimes 民

厳しい訓練を重ねて

11

か

6 災修

命と平

和

を守る」た

中林2佐による式

2 月 1 日、

音響

測定

所長

締まる思いでした。

富士総合火力演習研

動

いたしました。

との言葉を頂

き本当に

感

雑音

低減へ

の寄与及

周囲の人や職場(病

スタッフから尋ね

ら 院 れ

ません。

またそれが災害

ない

また一緒になるかもしれ

布」に至る一

連

管理

艇 \mathcal{O}

 \mathcal{O} 業

「どんなことするの

何?

後に

訓

隊

と思ってお

訓

練で

隊員紹介

ク

響業務の効率化を目

情

ついて「分

り得ら

れた音響

定に

桜満開の鹿屋航空基地正門

隊」を 第 と改称し、 域における警戒監視 マリア沖・ に改称され 中心とした日本周 和 航空 鹿屋航空基地隊 「第1 至り、 日 に 鹿屋. 隊、 9 年 7 現在の司 第1整 航空群」 昭 和 空隊」 東シナ 鹿 屋 月 屋 1 辺海 令部 3 6 備 空 お

大きく貢

極 隊

的な姿勢を示す活

対処行動

航空隊に20

積 次

遣

海

賊

・ を

及び業務量は大きく 大しており、 となく、世界中に広く拡 が必要とされる場は、 る の重要性が強く認識され しております。 もここ数年で、 本周辺海 そのため、 ようになって 対する 傾向の中で、 日本の 域にとどま の一翼を担 な利用のた 救助活動 突発的な大災 海上自: 第 1 イシュー 業務 近年、そ おります 海上防 など 衛 \mathcal{O}

常続的な警戒監 め、 によ うべ るこ 視活 基盤 変内俗容 空群 日隊 いては、 シャ 万 が もに、 S F : レ 災害派遣 えるべく を O 難 おります。 飛行隊 行い、 更に、 0 回を 昭 和 発 足

え常に準備をしてお 緊急時に 陸上 大規模災害に 務めて 県民 スキュー・スペ 超える急患輸送 恒常的に訓 救 の安心に応 英難隊(R に編成する 充実させ ス いるとと につ 練を

況 後 の も 覚し邁進してまい れる任務を柔軟に対応す 以上で、 1 介 は終 変化 我が国を取り巻く状 衛隊 わ ŋ 第 ます 1 使命 航空 与 が、 ŋ えら ます を自 群 今 \mathcal{O}

後



2

3 6 年

 \mathcal{O}

後ダンプ車両中

年

燃 料 •

一陸曹及び -隊 で 6 隊見学対応に従

事、そ

 \mathcal{O} 部

楽部の部外演奏支援・ で10年間写真業務

務し、

平 成 1 7

·年3月

鹿

火器・化学陸曹として勤

として5

年間募集業

務に

児島地本へ転属、広報員

従

事、学校訪問

や街

募

集に汗したものです。

E隊生活最

力

ます。 ると楽し のように に当たり、 かったこと等々走馬燈 自 衛隊を定年退官 かったこと、 振り返っ て て す 4 苦 る

等

陸曹昇

ず

カュ

1

年 3

ケ月で部隊が廃編

とな

小郡

広

や報音班

· 参 加

に及ぶ部外土木工

ŋ 自 勤 て き 駐 撼 屯

地区施

国

分の

繳

戦

の

1

大さ

会ん

大会がスター

選手宣誓で今年

国

分 ボ

駐

利

サックスを演奏する 江田3曹(右端)

ンスと何 を です。 んでしたが、見ている人 入部したことが \mathcal{O} 楽しま 私がサックス いる高校ではありませ 吹奏楽に力を入 より演 校で: せるパフォー ?きっか

け 7

くれたりする経験が私にり、感動して涙を流して々が笑顔になってくれたで演奏を聴いてくれた方 で演奏を聴いてくれ どに参加しました。そこ を変えられるか でしたが ンクールや地 · 」と期: 新鮮で衝撃的でし 自衛 を迎えた頃に高 チングコンクー 引っ込み思案 動が忘れら 隊に入隊し 待を募らせ 「ここなら 域のお ŧ 奏 れず 祭り れ自な分 な私 て活 て 3 校 た。 楽 i ル 入 な

りまし たくパ を 賞をいただけるまでに どんたく日田賞」とい ど です。 依 オーマンスの披露、ど 街 ました。 ライブを 主な活動は、大分県日 間市で毎年5月に開かれる観光祭に芸能隊としてる観光祭に芸能隊として を続があった各イベント に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するといった内容 に参加するまでになった。また、バンド に参加するといった内 る観光祭に芸能 苦楽を共にし 年 1 2 を通じ 月 行うことが れ 6日には 合 た仲間 って 地 出単 やの一代来独

鹿屋システム通信分遣隊 運用科 3等海曹 江田 絵里奈 記

会人として頑張って た教訓・体験を糧に 期間勤務することがで で広報陸曹として勤務 の5年間を第8施設大 自衛隊生活35年 児島で18 行こ まし 余 でこれ いと思 1様への 等多くの方々 Ŕ 謝致 撻が 晴 います。 諸 から日々 恩返し

の

きました。

してま

れて退官出来 しておりま あったればこそ 先輩・上 へのご指導上司・同 曹長 精進 \mathcal{O} つ もり ます L

勢揃いした出場12チーム

広 国

報分

班 駐

開会式、 来賓 みにしている大会で 大会を開催した。 杯ママさんバレー 元では常連チームが 年 2 月 8 域 の霧 楽部 回目となる大会で地 分駐 のママさんチー 沿島市副· 根 例の 2 8 屯地 Z O 本司令の挨 演奏で入場 駐屯 日 В 市 (日) ただだき Eチー 長中 今ボ 平 地 年一でル ŧ 楽 司 Δ 成 村 拶 をに 令

試合が続 コート・ トは独身者も含むマママさんチーム、Cコ 戦を行 とママさん選手達は動 大会は午後まで白熱し んチー れ込む熱 合がフルセットまでも 分 で 参 れぞれ決 A ¬ かれてそれぞれリー ムとして編成、 い、ほとんどの き、コート狭

ときした

れ いのてこ会まん会敗合まコ し食のて堂ムん様一た帰そといたで式ををで「午て事駐1でがどの」があれる。 で目 路れをで来いへ決行のト後いを屯年喫隊の にだったとしい2決はた堪地ぶ食員チー しお 能のりし食し 就れじるおた進閉勝試勝各

防衛省団体扱い自動車保険(指定店)

この団体扱いは一般契約に比べて保険料が

なんと19%割安です

が、本のでは、10mmでは、

《業務内容》

- ◆ 叙勲受章に際してのト-タル的なアドバイス
- ◆ 拝謁上京時のご案内
- ◆ 叙勲額・大臣表彰額及び特注額の販売
- ◆ 叙勲·大臣表彰等各種記念品及び贈答品の販売

叙位叙勲受章のご家族もお電話でお尋ね下さい

たからてんじんどう 灵柳鹭

鹿児島市伊敷8-3-12 電話: 099-218-4081 HP: http://www.jokun-iino.jp

●詳しい事は………

連絡先: 099-229-4103 FAX: 099-229-5176

[引受保険会社]

損害保険ジャパン 代理店 ASJ鹿児島 ※中古車販売及び車検も承ります。



安田勇康 (隊友会員)